転生したら、
なんか頼られるんですが 5

ALPHA LIGHT

猫月晴
Nekozuki Haru

アルファライト文庫


登場人物紹介
リーベル
エルフの里の長老。
見た目からは想像できないが、
その年齢は500歳近い。
ケミル
エルフの里の住人。
リーベルの言うことには
逆らえない。
レータ
謎の男。
石の中の少女と深い因縁が
あるらしい……？
ディノ
共和国の魔術師。
面倒見がいい。
感覚派で説明が下手。
???
石の中に
閉じ込められている少女。
なぜかエルによく似ている。
セリナ
エルが王都で出会った少女。
訳ありのようで、
身分を隠している。
ルフェンド
エルの兄。
ちょっぴりヘタレだけど
心優しいお兄ちゃん。
セイリンゼ
エルの姉。
勝気で頼りになるお姉ちゃん。
魔法が得意。
ルシア
エルの同級生で
アドラード王国の第一王子。
キラキラオーラ満載のプリンス。
エルティード（エル）
本作の主人公で元・社畜社員。
常識外れな能力で
いつもやりすぎてしまうのが悩み。

1

謎の生物のコランとともに突然、洞窟に転移してしまった俺――エルことエルティード・レシス・アドストラムは、そこで石の中に閉じ込められていた俺そっくりな女の子を見つけた。

するとそこに何故か、以前、王都で出会った冒険者のセリナさんとエルフの里の長老であるリーベルさんがやってきたのだった。

皆で洞窟を抜け、エルフの里へ行き、そこでセリナさんは、自分はラムダ帝国の皇帝、『セリーヌ・ラムダ』だと打ち明けた。

そして、セリナさんは彼女が国を出ることになったきっかけと千年前の聖女について話し始めたのだった。

◇　◇　◇

セリーヌはエルに説明しながら、自身の記憶をさかのぼっていた。

彼女がこの世界に誕生したのは、今から十六年前のことだ。

セリーヌはラムダ帝国の皇帝の子として生まれた。生まれた時点で、セリーヌは帝位継承順位の第二位だった。セリーヌには双子の兄がいたからだ。

兄の名前はディナンド。彼が帝位継承順位第一位だった。そう、本来ならば皇帝には兄のディナンドがなるはずであって、セリーヌがその座につくことはなかったはずなのだ。

ディナンドは明るく気さくな性格で、家臣から庭師にいたるまで、城のあらゆる人々に好かれていた。

勉学をすればその理解度に教師をおののかせ、武術をすれば指南役を負かしてしまう。類を見ない魔力量と巧みな魔力コントロール、そして放たれる難易度の高い魔法の数々。

にもかかわらず、そのことを少しも鼻にかけたりしない。

ディナンドが天才と呼ばれるようになるのはごく自然なことだった。人々は次期皇帝である彼に大きな期待をかけ、彼もその期待を上回る成果を上げた。

そんなディナンドだったが、彼をよく知る一部の人々は、実は彼に手を焼いていた。

「ディナンド様ー!!」

そんな風に必死でディナンドを呼ぶ声が聞こえたら、それは彼が城を抜け出した合図だ。

彼の従者はたまったものではないが、それ以外の人々はまたか、と微笑みとも苦笑ともつかない表情になった。

ディナンドはどこでそんなことを思いついたのか、そしてやろうと思ったのか、というような多種多様な方法で城からの脱出を試みた。

あるときは二階の窓から木を伝い、またあるときは鉤のついたロープを引っかけて塀を乗り越えた。別の日にはどこで手に入れたのか、ボロボロの服を着て堂々と裏口から出てみたり、極めつけには隠し通路なんてものまでこしらえたりした。流石にこれはディナンドが一から作ったわけではなく、もともと城にあったものを流用したのだが。

皇太子のディナンドがそんな有様なので、周囲の人々はたまったものではなかった。

彼には城から抜け出す才能があったので、ディナンドを止める、ましてや捕まえるなんていうことは不可能に近かった。

そんなディナンドだったが城から抜け出すのに、好きな場所に転移できる空間魔法を使うことは一切しなかった。彼なりの矜持なのか、はたまた周囲の人々の反応を楽しんでいたのか。それは本人にしか分からない。

ディナンドとセリーヌは特別仲がいいわけではなかったが、セリーヌは特に肩身の狭い思いをすることもなく、密かに兄のことを自慢に思っていた。

とにかくディナンドは申し分ない才能の持ち主で、誰もが彼が皇帝になると疑わなかった。

その絶対的ともいえるディナンドの将来に、転機が訪れたのは四年前、セリーヌとディ

ナンドが十二歳のときのことだった。

「兄上。そんな埃まみれになって、一体何をなさっていたのですか？」

ある日セリーヌが城の通路を歩いていると、全身埃まみれになったディナンドと鉢合わせた。埃のシャワーでも浴びてきたのかと思うぐらいだ。

しかし、ディナンドが服を汚して帰ってくるのは珍しいことではない。使われていない隠し通路を通って真っ黒になっていたり、倉庫を引っかきまわして、埃だらけになって帰ってきたりするのはよくあることだ。

それでもセリーヌがわざわざそう尋ねたのは、兄の様子がいつもと違ったからだ。どこが違うのか、と聞かれても答えられないが、何故だかそう思ったのだ。

ディナンドはセリーヌに呼び止められたことに気が付くと、ばつの悪そうな顔で振り返った。

「ちょっと探し物。それと、誰もいないときは敬語はやめろって言ってるだろ。俺たちは兄妹で、ましてや双子なのに、距離を感じるとなんだか寂しくなる」

才に溢れる皇太子と、凡庸な姫。誰から強制されたわけでもなかったが、セリーヌは近頃、兄に対してなんとなく敬語で接するようになっていた。

しかし兄はそれを嫌だという。セリーヌは苦笑して誤魔化す。ディナンドは不満そうな顔をするが、それ以上は何も言わなかった。

「なぁ、セリーヌ。これ見てよ」

「……本、ですか？」

「まぁ、似たようなもんだよ。これは先々代皇帝の治世、つまり俺たちのひいおじい様の時代の記録らしい」

「それを何故兄上が？」

「決まってるだろ。偶然見つけたのを持ち出してきたんだ」

「見つけた、って……一体どこで」

ディナンドは少しだけ迷ったあと、セリーヌに近くに来るよう言った。

埃だらけのディナンドに近付くのは躊躇われたが、どこで見つけたのかは気になる。セリーヌは埃を吸い込まないよう気を付けながら側に寄った。

「禁書棚だよ」

ディナンドは小声でそう言った。セリーヌは驚きのあまり声も出なかった。

「そこを引っかきまわしてたら、この通り、埃まみれになっちゃったのさ」

固まっているセリーヌをよそに、ディナンドは呑気な声でそう言う。手でパッパッと服をはたくと、大量の埃が空中に舞い上がった。

「き、禁書棚って」

「うん？　セリーヌも知ってるだろ。大人たちが絶対に入ってはいけません、って言って

るところだよ。ついにバレずに辿り着けるルートを見つけたんだよ」

セリーヌは驚愕していた。

禁書棚とは、広い書庫の奥の奥の厳重に鍵がかけられた扉の奥にある場所のことだ。

皇帝と、特別に任命された者以外は立ち入りが禁じられている場所。

セリーヌは忍び込もうなんて考えたことは一度もなかった。

「なんてことを！」

「うわ、急にでっかい声出すなよ」

ディナンドはわけが分からないと言いたげな顔だ。

「だって気になるだろ、中に何があるのか。セリーヌは違うのか？」

全く思わないと言えば嘘になる。しかしここで頷いたら、ディナンドの行動の正当化に使われるのは分かりきっていた。

セリーヌはぐっと手を握って顔を上げる。

「ですが兄上、禁書棚が立ち入り禁止なのは何か理由があるはずです。だからこそ、大人たちは口を揃えて言うのではありませんか」

「でもその理由を教えちゃくれない。入るなって言うなら、説明ぐらいしてくれたっていいと思うんだよ」

ディナンドはセリーヌの言葉に聞く耳を持たない。

「……それで？　中には何があったんです？」

「だからこの本がそれだって話だよ」

セリーヌが苦言ばかり呈したせいか、ディナンドは仏頂面でそう言った。

「ディナンド様!!　どちらにいらっしゃるのです!?」

そのとき、セリーヌたちの教師の声が聞こえてきた。大声でディナンドのことを呼んでいる。

どうやらディナンドは、授業をすっぽかしたらしい。

セリーヌがディナンドを見ると、彼は肩をすくめた。

「場所を変えようか。ついてこいよセリーヌ」

そう言うと、ディナンドは本を小脇に抱えたまま歩き出した。

セリーヌは教師にディナンドを突き出すべきか迷ったが、好奇心には勝てない。セリーヌは渋々といった表情を作って、けれど内心では少しだけワクワクしながら、ディナンドのあとを追う。

足音が聞こえれば息を潜め、通路を曲がるときは周囲の様子を注意深くうかがう。しかもディナンドはタイミングを計るのが妙に上手く、ほんのちょっとの隙をついては通路を走り抜けていく。

ディナンドが本気になれば、城の中の誰も彼を捕まえられないのも納得だった。

ディナンドは離れに放置されたままになっている空き部屋の前までやってくると、やっと足音を潜めるのをやめた。

ディナンドは埃だらけの床に躊躇なく腰を下ろす。セリーヌは少しだけ躊躇したが、その隣に座った。

「どうした？　そんなに見て」

「す、すみません兄上。なんでもないのです」

兄が隣にいる。それだけのことだったが、セリーヌにとっては随分久しぶりのことだった。

兄は勉学に武術にと忙しくしている上、空き時間にはすぐどこかへ行ってしまう。公の場以外でこうして隣り合って座るなんてことはもうずっとなかった。

ディナンドは不思議そうな顔をしていたが、何を思ったのか、セリーヌの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「わ、なんですか兄上」

「俺は兄だからな。妹が落ち込んでたら慰めてやらないと」

ディナンドが真面目な顔でそう言うので、セリーヌはなんだかおかしくなって笑い出してしまった。

「なんだよ。せっかく慰めてやろうと思ったのに」

「ふふ、だっておかしくて。私たちは双子なんだから、兄上のほうがほんの少し早く生まれたってだけなのに」

「別にいいだろ、俺が兄で、お前が妹なのは事実なんだから」

「そうだけど面白いんだもの」

セリーヌがくすくすと笑っていると、不本意そうな顔だったディナンドも堪えきれなくなったように笑い出した。

二人はひとしきり大笑いすると、埃も気にせずに床に寝転がった。

窓から差し込んでいる日差しが暖かい。舞った埃がちらちらと光に反射して綺麗だった。

「なぁ、セリーヌ。お前さ――」

ディナンドはそこで不自然に言葉を切った。セリーヌは隣に寝転がっているディナンドを見る。いつになく真剣な顔をしている。

「セリーヌは誰よりも賢いし、剣術だってすごく上手い。俺は知ってる」

急に褒められ、セリーヌは赤くなった。

「でも、兄上には敵いません」

セリーヌははにかみながらそう言った。照れ隠しもあったが、心からそう思っていた。

しかしディナンドは表情を暗くする。

「す、すみません兄上。私、何かだめなことを言いましたか？」

「セリーヌは俺よりも強いよ」

「え？」

ディナンドが言った言葉がよく分からなくて、セリーヌはあっけにとられた。

「俺、知ってるよ。先生にキツく言われたときも、訓練で怪我をしたときも、セリーヌは絶対に泣かないし弱音を吐かないことを。大変なことや辛いことがあっても、いつだって真っ直ぐ立って凛としてる。それってすごく強いと思う」

「え、あ、あわ」

混乱のあまりセリーヌは言葉にならない妙な声を発する羽目になった。

認められた嬉しさと、知られていた恥ずかしさがごちゃまぜになって頭の中は真っ白だ。

ディナンドはじっとセリーヌの目を見ている。

「でっ、でも兄上も、すごく強いと思います！」

セリーヌは真っ白になった脳内から、必死にその言葉をひねり出した。それは、間違いなく本心だった。

才に溢れるディナンドを妬むことがないわけではなかったが、セリーヌは己の兄を尊敬し、誇りに思っていた。

しかしディナンドは視線を逸らしてしまう。

「俺は、俺は……弱いよ」

ディナンドは目を合わせないままそう言った。

束の間の静寂が、長い時間のように感じられた。そうして、ディナンドはガバッと勢いよく起き上がった。

その顔には笑みが浮かんでいる。

「なんてね。さ、早く一緒に本を見よう」

ディナンドはそう言って本を持ち上げる。

セリーヌは先ほどのディナンドの発言が気になっていたが、本が開かれた途端そんな考えはどこかへ飛んでいった。

セリーヌはそろそろとディナンドの側へ近寄って、恐る恐る本を覗き見た。

ディナンドが適当に開いたページは、黄色を通り越して茶色になりかけている。

手書きらしき几帳面な文字で、ページいっぱいにびっしりと文章が書き連ねてある。文字に癖があるせいで少し読みづらい。

ディナンドは記録と言っていたが、その内容からは日記のような印象を受ける。

最近扱いに困る家臣がいるだとか、堅苦しい場面は苦手でどうにも肩がこるなどといった、日常のこまごまとしたことが書かれているようだ。

かと思えば、国をよくしていくためにはどうすべきか、というような難しいことも同じページに書かれている。

この文章を書いたとき、この本の持ち主は相当悩んでいたらしい。何度も思考が堂々巡りしているし、筆跡も他より乱れている。

「これが禁書棚にあったんですか？」

禁書になるようなものとは思えなくて、セリーヌは思わずそう尋ねる。

「俺を疑うの？」

「いえ、そういうわけじゃ……ただ、普通の日記に見えたので。禁書っていうのは、てっきりもっと危険で怖い本かと思っていたので」

「それはどうだろうな」

ディナンドはページに視線を落としたままそう言った。

「どういう意味ですか？」

「この日記も十分危険で怖いものかもしれないってことだよ」

セリーヌは何を言っているのか分からなかったが、ディナンドがふざけているようには見えない。

ディナンドがページをめくる。先ほどのページから、一ページ、二ページ、三ページ。さらに数ページほど紙をめくったところで、ディナンドの手が止まった。

そのページにはひときわ乱れた字が散らばっていた。そのぐちゃぐちゃな乱れようは、文字が悲鳴を上げているみたいで見るに堪えない。セリーヌは思わず顔をしかめる。

「このページには、千年前に起こったことが書かれてる」

ディナンドは顔を上げないまま、突然そう言った。何を言っているのか分からず、セリーヌはぽかんと口を開けた。

「もちろん正しいかどうかは分からない。でも貴重な情報であることは確かだ」

「ちょ、ちょっと待ってください。これはひいおじい様の時代のものなのですよね？　何故そこに千年前のことが」

やっとのことでセリーヌはそう言ったが、ディナンドは表情を変えない。自分が言ったことが本当のことだと確信しているみたいだった。

ディナンドは本に手を置いて続ける。

「もちろん、これは千年前に書かれたってわけじゃない。さっきも言った通り、この本はひいおじい様の時代のものだから、せいぜい百五十年か、長くて二百年ぐらい前のもののはずだ。もし千年も前のものだったら、とっくにボロボロに朽ち果てて読めたもんじゃないだろうし。ま、それは魔法で保護されてなければの話だけどさ。見たところこれには魔法はかかってない」

歴史書などは、紙の劣化や破損を防ぎ、時にはならず者の手から守るような魔法が施されており、長期間の保存が可能になっている。ならばやっぱり魔法のかかっていないこの本は、誰かの日記帳に過ぎないということなのだろう。たとえそれが禁書棚にあったとし

ても。

セリーヌは字の散らばったページを見る。セリーヌが目をやったところには、ひときわ乱れた文字で『禁忌が破られた』と書いてあった。

「今から約八百年前、大陸は危機に瀕した。全てを滅ぼさんとする災厄が訪れたのだ。魔力が乱れ、自然は脅威と化し、強靭な魔物が襲い来る。大陸中の人々はその繰り返しに絶望した。しかしそれは白髪で紫色の瞳をした、美しい少女の手によって終わりを迎えた。彼女は世界に救いをもたらすと、役目を終えて天へと帰ったという。人々はその少女を神の使いと称え、聖女と呼んだ」

セリーヌは少し遅れて、どうやらディナンドが書かれている内容を読み上げているようだと気付く。よくこの乱れに乱れた癖字を読解したものだと、セリーヌはこっそり感心した。

八百年前。この日記が約二百年前に書かれたものだと仮定すると、今から約千年前の話だということになる。ディナンドの言っていた通りだ。

災厄に聖女。いずれも聞きなれない単語で、セリーヌは首を傾げた。

「当時は誰一人知らない者がいなかった英雄も、いつの日か昔話と化し、そして不確かな伝承と化していく。今はもう限られた者しか知らないし、仮に知ったとて信じる者は少ないだろう。私も知った当初は、そんなよくある英雄物語なぞ信じていなかった。しかし今、

私はこの話は確かに真実なのだと確信している。その理由を今からここだけに書き記す」

ディナンドは文字を目で追いながら、少しもつっかえることなくすらすらと読み上げていく。興味をそそられる内容ではあったが、淀みなく、一定の速度で文章を読み上げるディナンドの声を聞いていると、セリーヌは段々と眠くなってきた。

ディナンドの声質は高すぎず低すぎず、とても心地いいのだ。澄みわたった声音は歌うとより顕著になり、城の中でもディナンドの声は綺麗だと有名だった。

「今から十年前、伝承を耳にした私は興味を持ち、密かに調査を始めることにした――」

透き通った優しい声が隣から聞こえる。幼い頃からよく知っている、尊敬する兄の声だ。迫りくる睡魔に耐えられず、セリーヌは深い眠りの波に呑み込まれた。

セリーヌは軽く揺さぶられる感触で目を覚ました。

「セリーヌ、セリーヌったら！」

「……兄上？」

セリーヌが目を開けると、ディナンドは肩を揺すっていた手を離した。むっすりと不満げな顔をしている。

セリーヌは目を擦りながら辺りを見る。それで、さっきまでしていたことと、自分がいつの間にか寝てしまっていたことを理解した。

「随分と気持ちよさそうに寝てたけど、話、どこまで聞いてたんだ？」
ディナンドは不満げな顔でそう言った。
セリーヌは記憶をなんとかさかのぼってみる。
「……ええっと、調査を始めることにしたっていうところまで」
「ほとんど聞いてないじゃないか！」
ディナンドは大声でそう言うと、くしゃくしゃと自分の頭をかく。
「あーもう、せっかく俺が読み上げてやったのに、セリーヌったらぐっすり眠っちゃうんだから。さぞかしよく眠れたことだろうね」
セリーヌは少し迷ってから頷いた。本当にぐっすりと、気持ちよく眠れたのだ。
「あっ、そう！　そりゃ、よかった！」
ディナンドはそう言うと、わざとらしくそっぽを向いた。
「す、すみません兄上。兄上の声があまりにも気持ちよくて」
「声？」
「はい。城の者も、兄上の声は素敵だとよく言っているではありませんか」
「……まぁ、言われないこともないけどさ。でもこんなの、声変わりするまでだよ。声変わりしたら高い声は出なくなるって聞くしさ、しばらくは歌も歌いづらくなるだろうな」
ディナンドは歌が上手かったし、本人も歌を好んでいるようだった。だからなのか、そ



れとも別の理由があるのか、ディナンドは時折声変わりを嫌うようなことを口にする。
既にディナンドとセリーヌの間には男女の体格の差が出始めている。ディナンドのほうが少しだけ身長が高いし、体格もセリーヌと比べればしっかりしている。
見た目だけなら少しの差だが、武術となると、その差は顕著だった。
ディナンドはセリーヌと差ができることを昔から嫌う。誰かが片方を贔屓すれば問い詰めるし、いつだって平等であろうとした。もっとも、事実としてディナンドのほうが優れているのは確かであったが、それでも。
ディナンドはセリーヌとの『双子の兄妹』という関係性を、ひときわ大切に思っているようだった。周りの誰よりも、セリーヌよりも。
「ま、聞いてなかったなら仕方ない。簡単に説明すると、この日記を書いた誰かは千年前に起こったことの真実を突き止めたわけだ」
ディナンドは簡単にまとめて説明した。日記を見ると、セリーヌが寝てしまう前に開かれていたページではなかった。あの内容は、どうやら数ページにわたって書かれていたらしい。
「真実？　最初に言っていたものとはまた違うのですか？」
「そんなに焦るなよ。順番に説明してやるから」
ディナンドは笑いながらそう言った。

「大まかな部分は伝承、つまり最初に書いてあったのと同じだ。問題は最後の部分。神の使いであるはずの聖女は、実は天に帰らなかった。いや、帰れなかった」
「帰れなかった……」
そう繰り返すと、ディナンドは目を合わせないまま頷いた。
ぺらりとページがめくられる。
「本来なら、役目を終えた聖女は天へ帰るはずだったし、伝承にもそうある。けれど実際には、聖女は帰ることができなかった。これを書いた誰かは、調査の結果、その結末を知った。聖女は地上に残っていた。いや、引き止められていたというほうが分かりやすいかもな。何しろ、聖女は人間のせいで帰ることができなかったんだから」
ディナンドは暗い顔でそう言う。
「人間のせい？」
セリーヌはその言葉を繰り返した。まさか人間が、聖女という英雄とも呼ぶべき存在に害をなしたというのか。
「聖女はこの世界のどこかで、石の中に閉じ込められている」
「石の……中」
「誰かの魔法によって、今もずっとだ」
「で、ですが兄上。魔法はかけた本人が亡くなったら解けるはずでは……」

見当違いな指摘かもしれなかったが、あまりの驚きにセリーヌはそんなことしか浮かばなかった。

「術者もずっと生きてるんだよ」

ディナンドは神妙な顔でぽつりとそう言う。

「そんな……人間以外の長命な種族であっても、千年間も生きられる者など」

セリナは思わずそう反論していた。

なんとしてでもこの非現実的な話を否定しようと、本能が勝手に言葉を紡ぐ。

しかしディナンドは表情を崩さないまま続ける。

「石の中に閉じ込めたのも、そんなに長い時間生きるのも、どうやったのかはさっぱり分からない。でもここにはそう書いてあるんだ。もちろん、ここに書いてあることは与太話かもしれないし、俺も現実的に考えて、そんなことあり得ないって思ってる。でも、この世界にはまだまだ俺たちの知らないこと、そして誰も知らないことがきっとたくさんあるんだ。ここに記されていることが正しい可能性だってあるんだよ」

ディナンドはどこか遠くを見るような目をしてそう言った。

「そしてこれが禁書棚にあったってことは、ここに書かれていることが真実にしろ虚構にしろ、誰かがこれを人の目に触れさせてはいけないって思ったってことだ」

セリーヌはディナンドの言葉に思わず息を呑む。

そうだ。これは本来見てはいけないものなのだ。限られた者しか入ることのできない、禁書棚にあったものなのだ。

罪悪感とも危機感とも取れない感情が、セリーヌの胸の中に渦巻く。

「そして、これにはまだ続きがある」

セリーヌは固唾を呑んだ。ここまでで十分衝撃的な情報だったというのに、まだ続きがあるというのか。

ディナンドがさらにページをめくる。ページいっぱいに、大きな文字で焦ったように書かれている。

『見つかった』

罫線も何もかも無視して書かれたその字からは、書いた誰かがどんな心情でいるのかが手に取るように伝わってくる。焦ったせいでインクがボタボタと垂れた跡がいくつもあった。

「『あいつ』に見つかった。私はもうだめだ。もしこれを読んでくれる誰かがいるのなら、私の調査結果の全てと、頼み事を託す。どうか聖女を見つけ、この地から解き放ってくれ」

ディナンドが硬い表情で読み上げる。

日記はそこで終わっていた。

セリーヌとディナンドの間に、張りつめた空気が流れる。
「俺、捜してみるよ」
そう言うと同時に、ディナンドがパタンと日記を閉じる。
セリーヌは数回瞬きをしたあと、ディナンドの顔を見た。
「捜してみるって。まさか、聖女のことですか？」
「それ以外に何があるんだよ」
ディナンドは呆れたようにそう言う。
「この日記の持ち主の願いは、道半ばで叶わなかった。俺がその遺志を引き継ぐんだ」
ディナンドは布張りの表紙の、ところどころ剥げたところを指先で撫でながらそう言う。
「なんて言ってみたりして。ほんとはただの好奇心さ」
ディナンドはそう言って笑うが、セリーヌの表情は硬いままだ。
「兄上は、この日記のことを信じるのですか？」
「全部信じるとは言わないよ。でも、やってみる価値はあると思う」
「でも、でも兄上、最後の文章がどうしても気になるのです。『あいつ』に見つかったとは一体……そしてこの日記の持ち主はどうなったのですか」
ディナンドは顔を上げ、セリーヌの目を見た。セリーヌはディナンドの緋色の瞳に吸い込まれそうになる。

自分も同じ色の瞳をしているはずなのに、ディナンドの目からは深い湖のような底知れなさを感じるのだ。
「おそらく命を落としたんじゃないかと思ってる」
ディナンドはセリーヌの目を正面から見てそう言った。おそらくとは言ったものの、確信しているような口ぶりだった。
「なら！　それを分かっていて行動するというのですか！」
セリーヌは苛立ちを露わにそう叫ぶ。けれどディナンドは動じない。
変わらない表情で、じっとセリーヌを見つめている。
「だって、ずっと閉じ込められているなんて、聖女が可哀そうじゃないか」
ディナンドはあっけらかんとそう言った。まるで迷子になった子供を憐れむような言い方。
セリーヌは頭がクラクラした。
そうだった。兄にはこういうところがあった。
セリーヌはこめかみを押さえて、心の中でそう呟く。
際限のない優しさを誰彼構わず振りまいて、自分の身は全く省みない。お人好しなんて可愛いものじゃない。ある種の異常だった。
その上、己の決めたことに一直線で、おまけに面白いもの好き。

この日記の内容は、ディナンドの興味を引きつけるには十分すぎるほどだった。
ディナンドに考えを改めさせることは不可能に近いだろう。
セリーヌはディナンドに悟られないよう、こっそりため息を吐いた。
「城から抜け出しついでに、ちょっと調べてみるだけだよ。危なくなんかないって。セリーヌは心配性だなぁ」
ディナンドが楽観的すぎるだけなのだと思ったが、セリーヌは何も言わなかった。

◇　◇　◇

それからディナンドは、城を抜け出すたびに聖女についての調査をした。
あるときには帝都で聞き込みを、またあるときには空間魔法で国中を駆け回って手がかりを探した。しかし目立った成果は得られなかった。
それが変わったのは、ディナンドとセリーヌがあの日記を見つけてから、半年ほどが経ったときだった。
ディナンドは当初ほどの熱意はないものの、根気よく調査を続けていた。
そしてある日、またもや授業をすっぽかしていたディナンドが、中庭で本を読んでいたセリーヌのもとへ現れたのだ。

よっぽど急いでいたのか、それとも遠くまで行っていたのか、珍しく空間魔法での移動だった。
「聞けよセリーヌ、すごいことが分かったんだ！」
セリーヌが本から顔を上げた途端、ディナンドは興奮した様子でそう言う。
セリーヌが口を挟む間もなくディナンドは話を続ける。
「聖女はクリスト共和国にいる」
ディナンドが突然そんなことを言うので、セリーヌは口をあんぐりと開けた。驚きのあまり、そうするしかなかったのだ。
しかしそれだけでも十分驚きは伝わったらしく、ディナンドは満足げな顔をした。
「……クリスト共和国って、あの共和国ですか？」
ディナンドは重々しく頷く。もったいぶっているのが丸分かりだったが、今のセリーヌにはそんなことを指摘する余裕はなかった。
驚きの波が引いてみると、次々と疑問が湧き上がってきて、脳がはちきれそうになる。
「でも、どうやって突き止めたんです？　半年間調査しても、なんの手がかりも得られなかったはずじゃ」
セリーヌはやっとの思いでそう口にした。
ディナンドは得意げな顔で、懐から例の日記帳を取り出した。

「これだよ、これ。やっぱりヒントはこの日記にあったんだ」
ディナンドは日記帳をひらひらともてあそびながらそう言う。
「全く俺も間抜けだよな。あちこちを飛び回るより先に、この日記をくまなく調べるべきだったんだ」
「兄上、それで、一体何があったんです？」
待ち切れなくなったセリーヌがそう尋ねると、ディナンドはにやりと笑った。セリーヌの隣に座り込んで、ページをめくり始める。
ディナンドは、大まかな図のようなものが描かれているページで手を止めた。
「何かの図、ですか？」
「地図だよ地図。この日記をなんとなく見てたらさ、なんの脈絡もなく地図が描かれてるページを見つけたんだ。それがこのページ。でもざっくり描いてある上になんの説明もなかったから、実際に使われてる地図と見比べたんだ」
ディナンドはそこで言葉を切って、セリーヌの目を見た。
「そしたら、同じ地形があったんだよ！」
ディナンドは心底嬉しそうにそう言った。
「なんだよ、反応薄くないか？」
「い、いえその、そもそもこれはなんの地図なんですか？」

「決まってるだろ。きっと聖女がいるところだよ」
ディナンドは呆れたようにそう言った。
それもそうだ。この日記は最初こそ雑記といえど、後半部分は、ほとんどが聖女について書かれたものなのだから。
改めて理解した途端、セリーヌは驚きと同時に、抑えられない胸の高鳴りを感じた。ワクワクともドキドキとも言い表せないような何か。
セリーヌは食い入るように日記を見た。地図にはぐりぐりと塗り潰したような黒い丸がある。この印の場所に、きっと聖女がいるのだ。
「それで、もう確かめてきたんですか？」
「まさか。まだに決まってるだろ」
ディナンドはムッとした顔をした。
「お前と一緒に行こうと思って、今大急ぎで伝えに来たんだ」
セリーヌは衝動に任せてすぐにでも出発したかったが、冷静な自分がそれを止めた。
興味がないわけではないし、むしろ行きたい。けれど懸念が勝つのだ。
セリーヌにはこれから剣術と魔法の授業がある。セリーヌが授業に来なかったら、教師や従者が一体どうしたのかと城中を捜し回ることになるだろう。
常習犯のディナンドならまだしも、セリーヌが抜け出すと城が大騒ぎになることもあり

得る。

それが、素直に行くと言えない大きな理由だった。

それに、気になるのはあの日記の最後の文章だ。乱雑に書かれた『見つかった』の文字。

一体誰に、何に見つかったのかも、それが聖女とどういう関係があるのかも分からない。

セリーヌが黙り込んでも、ディナンドはそうなることを見越していたのか、何も言わなかった。ディナンドは案外、人の心の機微に敏かった。

「別に無理にとは言わないさ。ただ、一応呼びに来ただけだから」

ディナンドはぼそりとそう言う。セリーヌはその声を聞いて、顔を上げて立ち上がった。膝の上に乗せたままだった本が地面に落ちる。

ディナンドは驚いたようにセリーヌを見上げた。

「私も行く。こんな面白いこと、黙って見てるわけにはいかないもの」

セリーヌがそう言うと、ディナンドはにやつきとも微笑みとも取れない笑みを浮かべた。

◇　◇　◇

ディナンドの空間魔法で、まずは行ったことのある地図付近の場所まで移動する。

地図の場所は、クリスト共和国とラムダ帝国とアドラード王国に囲まれているものの、

どこの国にも属していない土地だった。

セリーヌは城が大騒ぎにならないかずっと心配だったが、ディナンドが全部自分のせいにしていいと言ったので、少し安心できた。もっとも、できる限り自分も解決するつもりではあったが。

セリーヌたちが転移した先は、ラムダ帝国の国境付近の深い森の入り口だった。

「こんなことならナイフか何か持ってくればよかった」

ディナンドが枝葉を押しのけながらそう言う。セリーヌはスカートの裾を倒木にひっかけそうになって、慌てて避けた。スカートの裾をほつれさせたら、城の者の仕事を増やしてしまう。

今セリーヌが着ている服は普段着とはいえ、曲がりなりにも皇女の着るものなのだ。布地がたっぷりと取られたスカートの裾はくるぶし近くまであり、レースやフリルなどの装飾が縫い付けられている。

靴も男性が履くような動きやすいものではなく、足の甲の部分が空いた、見た目重視のものだった。ヒールがないことが唯一の救いだったが、それでも動きづらいことこの上なかった。

セリーヌは、仕方なくスカートの裾を持ち上げて進むことにした。

「服装も変えときゃよかったな」

ディナンドは、スカートを持って慎重に進むセリーヌを見てそう呟く。
なんだか自分が情けなくて、セリーヌは項垂れた。
しかしディナンドは、そんなセリーヌをよそに何やらごそごそと腰回りを漁り始めた。
ポケットから何か出すつもりなのかと思ってセリーヌが見ていると、いつの間にかディナンドの手には革のベルトが握られていた。
「それ、兄上のベルトですよね？　一体何を……」
「大丈夫。このズボン、ちょっと小さめだからずり落ちたりなんてしないさ。多分」
ディナンドはそう言うと、セリーヌの後ろ側に回った。
「セリーヌ、ここちょっと持ってて」
スカートの裾を二重になるようにして折りたたみ、手で持っておくようディナンドが指示する。
何をするのか分からないでいると、ディナンドはベルトをセリーヌの腰にぐるりと一周させた。そしてスカートの布地を器用に折りたたみながら入れ込み、あっという間に固定してしまう。
「もう離していいよ」
セリーヌは言われた通りにする。手を離しても、もうスカートは落ちてこなかった。
くるぶし近くまであった裾は半分に折りたたまれた状態で固定され、膝が見えるぐらいの丈になっていた。

普段ここまで丈の短い衣服を身に着ける機会はなかったのでセリーヌは少々気恥ずかしかったが、これならさっきまでよりずっと動きやすい。
「一応外れないようにはしてあるけど、あんまり激しくは動くなよ」
ディナンドは一仕事終え、満足げな顔でそう言った。
動きやすさを確かめるため、軽く飛んだり足踏みしたりしていたセリーヌが慌てて動きを止めると、ディナンドは「それくらいなら平気だよ」と言って笑った。
「今度どっか行くときは、俺の服を貸してやるよ。まだそんなに大きさは変わらないだろ」
「じゃあ、次はお願い」
今度があるのかは不明だったが、セリーヌはひとまずありがたく頷いておく。
動きやすくなったところで、二人は歩を進めた。しばらく歩き回るが、やっぱり何もない。
「うーん……見事になんもないな。確かにこの辺のはずなんだけど」
ディナンドは日記を右に倒したり左に倒したり、上下を反対にしてみたりと色々と試しながらにらめっこしている。
ディナンドもセリーヌも方向音痴ではなく、地図を読むのも苦手ではない。見当違いの

場所に辿り着いた、なんてことはないはずだ。
けれど事実、ここには草木と少しの石ころ以外何もなかった。
「もしかしてただのメモで、聖女にはなんの関係もなかったとか？」
「いや、それはない。この日記の後半は、全て聖女のことについて書かれている。そこに急に無関係なメモが挟まるとは思えない」
「でも、たまたま書きつけるものが近くになくて、仕方なくとか……」
「こんなに分厚い日記帳にびっちり字を書くような几帳面なやつだぞ。そんなことあると思うか？」
ディナンドは実際に字が所狭しと書き込まれたページを見せつけながらそう言った。
確かにその通りだが、何もないんだからそう思ったって仕方ないだろう、とセリーヌは内心思った。
「……ん？　んん？」
前を歩いていたディナンドが、突然奇妙な声を上げる。
「どうしたんですか？」
「いや、なんか一瞬変な感じがして。何とは言えないんだけどさ」
ディナンドは首を傾げながらそう言う。
セリーヌも五感に意識を集中してみる。

しかしセリーヌがその正体に気付く前に、ディナンドが声を上げた。
「分かった！　この辺り、魔力濃度が高いんだよ。そんなに深い森ってわけでもないのにさ」
「だとすると……」
「地下に洞窟か何かがあるのかもしれない」
「兄上、十分に気を付けてくださいよ。魔力濃度が高いなら、いつどこから魔物が飛び出してくるか……」
「大丈夫大丈夫、武器は持ってないけど、俺、魔法は得意なんだから。もし魔物が襲ってきたら岩でドーン、火でバーンだ」
確かにディナンドは魔法が得意で、ちょっとした魔物ぐらいなら簡単に倒せるだろう。
ディナンドは地属性の魔法で衝撃を与えて隙を作ってから、炎で攻撃するという手法をよく取っていた。今の説明はそういう意味だろう。如何せんディナンドは説明が下手だった。
「もしかして、地下に聖女も閉じ込められてるのかもしれないぞ」
「でも、どうやって捜す気ですか？」
「そんなの簡単だ」
ディナンドが地面に手を突く。すると、その周辺の土が隆起する。
「こうすればいいんだよ」

ディナンドがそう言った瞬間、凄まじい轟音が鳴り響く。地面にひびが入り、ぼろぼろと砂のように崩れてゆく。セリーヌは思わず目を閉じ、両手で耳を塞いだ。

音が収まった頃、恐る恐る目を開けると、地面にはぽっかりと大きな穴が開いていた。

セリーヌはゆっくりと穴の淵に近付き、中を覗き込んでみた。日の光が差し込んで、穴の周辺だけがぼんやりと照らし出されている。

セリーヌがもっとよく見ようと身を乗り出したとき、手を突いていた箇所の土が崩れた。

「わっ！」

「危ない！」

鋭い声が聞こえたかと思うと、セリーヌは手のような形をした土に抱きとめられていた。衝撃はなく、背中にはふわふわとした柔らかい感触が伝わってくるだけだ。

「よかった、間に合った。あんまりヒヤヒヤさせるなよ」

ディナンドが上から穴の中を覗き込んでそう言った。セリーヌは苦笑いした。

「よいしょ、っと」

「おい、セリーヌ」

セリーヌが土でできた手から穴の中に飛び下りると、上から咎めるような声がかかる。

「兄上も下りてきたらどうですか？　ここの地面は思ったより平らだし、飛び下りても平気ですよ」

「分かった分かった、すぐに行くから」

すぐに上からディナンドが降ってくる。セリーヌの近くに来たので、セリーヌは慌てて飛びのくはめになった。

「気を付けてください、兄上。私、ぺしゃんこにされるところでしたよ」

「ごめんごめん。でも避けたんだからいいだろ」

「それにしても――まさか本当に洞窟があったなんて」

「疑ってたのかよ」

「そういうわけじゃないけど、やっぱり信じ難かったというか」

セリーヌは辺りを見回す。穴から光が差し込んでいるものの、奥は真っ暗だ。

暗いとセリーヌが思った瞬間、ディナンドが火を灯した。

地属性、火属性ともに、ディナンドは無詠唱での発動が可能だった。

「さ、行こう。きっと聖女にもうすぐ会える」

それから数分後。地上に開けた穴から洞窟の中へ下り立ったセリーヌとディナンドは、分かれ道の前で立ち尽くしていた。

「これで何回目だよ。入り組みすぎだろ、この洞窟」

「帰るとき大丈夫でしょうか」

「……ま、大丈夫だろ」
「なんですか今の間は。途端に不安になってきました」
「大丈夫、大丈夫。それにセリーヌは記憶力がいいんだから」
「私任せですか！」
「もとよりそのつもり」
ディナンドはそう言ってにやりと笑った。
そんな会話を交わしつつ二人がどちらの道へ行こうか迷っていると、セリーヌは物音を感じた。
セリーヌは反射的に振り返るが、そこには何もない。気のせいだったのだろうか。
「どうした？」
ディナンドが振り返る。
「何か音がした気がして」
「音？」
ディナンドがそう言った瞬間、また物音が聞こえた。無数の足音のように聞こえるそれは、ひどく不気味で、聞く者の恐怖を煽るような音だった。
セリーヌは思わずディナンドの服を掴み、身を寄せた。
ディナンドは手元に浮かぶ明かりの火力を落とし、暗闇に目を凝らしている。

立ち読みサンプル
はここまで

「魔物でしょうか」
「分からない」
小声でそんな会話を交わす。物音は徐々に近付いている。
ついに間近までやって来た。セリーヌの足がガクガクと震え出す。セリーヌは懸命に自身を落ち着かせようとしたが、いくら深呼吸をしようとしても呼吸は浅くなるばかりだった。
ディナンドが火を大きくする。岩壁に一瞬、人の影のようなものが映るが、逃げるように消える。
「……誰だ！　出てこい！」
ディナンドがそう叫んだ瞬間、黒い影が音もなく現れた。
「ひっ……」
セリーヌが小さく悲鳴を上げた瞬間、影がずざざざと異様な音を立て、セリーヌたちに襲い来る。そして影がその体をもたげ、ぶわりと広がる。セリーヌとディナンドの視界が暗闇よりもいっそう暗い漆黒に包まれた。
ディナンドがセリーヌを押しのけるようにして前に出る。
「岩よ！」
ディナンドは簡易詠唱を用いて岩を落とすが、影は素早く身を翻してそれを躱す。いや、